

♪ 2023年度 *poco a poco* ♪

Nr. 13 2023年10月12日(木)

文責:プファイル・辰巳

いよいよ今週末は学校祭!

夏休みが明けて約2カ月。みなさんが準備や練習を続けてきた2023年度学校祭が、いよいよ明後日に迫ってきました。楽しみでもあり、ドキドキしたりもしますね。緊張するとは思いますが、本番ではその緊張感が集中力をもたらせてくれるものです。失敗をおそれず、堂々と演技したり歌ったりして欲しいものです。

また父母の会のみなさまも、バザーの準備お疲れ様です。子どもたちの活動とともに、楽しく充実した2日間になることと思います。

そして学校祭が終われば、秋休みに入ります。芸術の秋、読書の秋、食欲の秋...いろいろな過ごし方ありますね。まずは2学期前半の疲れをほぐし、後半に備えてエネルギーを充電してください。2学期後半も元気に過ごせるといいですね!

音楽こぼれ話 < 音楽の中で活躍する動物たち ⑩ 最終回

ペットの代表 ~ 犬 ~ >

動物シリーズの最終回は、私たちの生活の中で猫と並んで最も身近なペットの代表「犬」についてです。犬にちなんだクラシック音楽を3曲紹介したいと思います。

1曲目はアメリカの作曲家アーサー・プライヤーの「口笛吹きと犬」という曲です。作曲家自身が飼っていたロキシーという犬がモデルだそうです。日曜日の朝の公園を少年が口笛を吹きながら犬と散歩する様子が音楽で表現されています。口笛のメロディはフルートが演奏することが多いですが、口笛の上手な人が、みごとに演奏する場合もあります。楽しい曲で、日本のファミリー向けの演奏会で聴ける機会もあるのではないかと思います。



2曲目は題名が変わっています。フランスの作曲家エリック・サティの「犬のためのぶよぶよとした前奏曲」というピアノ独奏曲です。日本語で「ぶよぶよとした」と訳されている単語は、「無気力な」とか「だらだらした」というふうに訳した方がよいのではないかという方もいます。

この変わった題名を付けたサティは、題名によって作品に先入観を持ち、判断しようとする聴衆に対する挑戦的な畏ではないかという批評家もいます。実際タイトルとは裏腹に、なかなか引き締まった楽曲になっています。また「前奏曲」と言いつつ、全体は4つの部分からなり、のっそり歩く犬の姿や牧歌的な風景の中を散歩する犬の姿、やや軽快な犬の足の運び、お昼寝する犬の夢のようなメロディなどが5分ほどにまとめられています。

最後はみなさんもよくご存知のポーランド人作曲家フレデリック・ショパンの「子犬のワルツ」です。ショパンは他にもワルツをたくさん作曲していますが、ワルツの中では第6番、全作品の中ではOp.(作品番号)64-1となっています。日本語では「子犬のワルツ」という題名で親しまれていますが、ドイツ語では「Minutenwalzer(1分ほどで終わってしまう曲)」などと呼ばれています。

ショパンの恋人であり女流作家であったジョルジュ・サンドの愛犬が、自分のしっぽを追ってくる回る様子が可愛くて、それをピアノ曲に仕上げたと言われています。また中間部の高音は、犬が首に下げている鈴の音だともいわれています。

さて10回に渡って連載してきました「音楽の中で活躍する動物たち」、いかがでしたでしょうか。動物たちと一緒にいろいろな曲に親しんでいただけたらと思います。

次回からの話題は...? 只今準備中、私の秋休みの宿題です。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

ファミリーのためのクリスマスコンサート(6歳以上の子ども向け)

(Weihnachtskonzert für Familie)

日時: 12月20日(水)と22日(金)の18時から

場所: Neue Kaiser Kaisestrasse 28

60311 Frankfurt

※古い銀行の建物を食や文化のセンターとして再建したそうです。

チケット:フランクフルト・オペラの主催になりますので、そのサイトで取れます。

(10月15日から発売開始)